

◆プロローグ

「いつも、何を書いてはるの？」

「あれこれと、メモとか。紀行を書いていますので…。私はまとめるまでが旅行で、趣味なんです」

「ふ～ん、私、写真も見返したことはないけど」

という N 妹さんは、14 日には次の旅に出るとのことだった。

そういえば、どなたもスマホを離さず、「午後から雨だって」や「明日のホテルは、昨日より、もっと山から離れているみたいよ」や「オッ、日本でのビッグニュースや。長嶋さんが死んだんやて」と会話しているし、やたら決めポーズ写真を撮ってはいるが…。今現在のここがどうで、どう説明されたかなどは、この時点でもう聞き流し、上の空状態だ。

昔も、山ガイドを書くにあたって、どう記録するか？は悩ましいことだった。デジカメに撮影時刻データが残るのには救われた。でも映像化できないことはやはりメモするしかなかったし、録音機器は、聞くときには冗長過ぎて厄介だった。何よりメモしようの意識そのものが、聴こう、見ておこう…になる。脳科学的に正しいのだし、せっかくの現地に来て、そこを味わってこないと、もったいないではないか！



《迷魂台》

今回の参加は 17 名で、内訳は夫婦 4 組、女同士（姉妹、友人）4 組、シングル参加は私のみ…の構成だった。83 歳を筆頭に、40 代 1 名を除いて、あとは 60 歳以上の構成。戌・亥や卯（79～73 歳）あたりが多いのは、「亥は干支の最後で、全ての福が集まります」などの、工芸館での干支にちなむ美術品の説明への反応で、互いにバレていた。

アメリカ旅行で閉口させられたスマホについては「中国国内では、国外のウェブページや SNS、スマホアプリが、中国政府の方針により閲覧が規制されてい

るものがございます。」とあり、「必要な場合以外はモバイルデータ通信を OFF にすることをお勧め」でもあった。

スマホ音痴の私はかえってホッではあったのだが、この件については、皆さんは「レンタル WiFi の利用」にしたり、多機能の最新機種に変えたりして対応していたようだ。「こんな所へ行ってきたのよ！」の見せびらかしは、スマホ撮影でなくては対応できないわけだし、その難題にはしっかり取り組んだものらしい。

珍しく、スマホとデジカメを両使っていた P 夫人の場合は「スマホは、出先でちょっと友達に見せるため。デジカメの方は、後でプリントしてアルバムにするため。メモリーカードをカメラ屋に持ち込んで、写真をじっくり選んでプリントしてもらおう。5 時間くらいかかるけどね。でも私は、アルバムにして、ゆっくり見返したい方だし、スマホはそれがやれないし…両方使うしかないのよ」と言った。

デジタル機器は多種溢れているけれど、みんな、やりたいことと、習得時間と、掛ける費用に、折り合いをつけているものなんだ。

さて、今回の武陵源（張家界）は、奇岩地帯で、2009 年の映画「アバター」のモデルになってから、欧米では有名になった。ガイドのハンさんによれば、「2000 年に、フランスのヘリコプターが天門洞をくぐり抜けてから、有名になりました」…となるそうだ。

それまでは、暮らすには不便な所で、奇観は奇観でも仙人が暮らすような別世界…あたりまでだったようだ。一方、なぜか韓国には「親孝行したければ、張家界に連れていけ」の格言があり、今も海外観光客の一位（4 割）を占めている。リピーターも多いそうだ。

武陵源地区は 1992 年に世界遺産になり、世界最長のガラス張り吊橋はドイツの援助で、世界最長の天門山ロープウェイは、スイスの援助で掛けられ、誰もが楽しめる景勝地となった。ここと少数民族の最美といわれる鳳凰古城を、新幹線で繋ぎ、さらにリニアモーターカーも接続させて、極上の観光エリアが整備されつつある…となる。

ノーベル賞に限らず、「世界」とは、ほぼ欧米圏のことだった。欧米が認めなければ、「世界的な」の表現が使えない。そういった戦後固定していた価値観が、近

年大揺れし、崩れだした。グローバル経済で各国が台頭し、世界の安価な工場に甘んじていた中国が GDP 世界二位となった。IT 時代に入って米中二大大国の時代がいよいよ見えてきている。



《ミャオ族の料理》

コロナ前の上海ツアーの時も思ったものだが、中国の隣国である日本（の大衆）が、とりわけ、勘違いが甚だしいようだ。

「うだつ」を指して「日本にもあるのよ」と言った私達に、現地ガイドは『『うだつ』も、元は中国の文化だよ、漢字も中国だよ。日本はみんな、中国の真似をしているんだよ』と言った。その通りだ。

「中国 4000 年」といわれてきた大国は、長く本物の大国であり続けてきたが、ちょうど日本の近代化の時代に、列強の貪欲で狡猾な蚕食を受け、惨めな国に落ち込んでしまった。富国強兵を図っていた日本は、そんなタイミングで中国の愚かぶりを見てしまい、列強にならって尻馬に乗ろうとした。

そんな強引な夢は泥沼に突っ込み、敗戦国になったのに、目覚ましい経済復興をなしとげられた。それは、連合側には、対共政策として日本を民主国側に取り込み、独立させておけば都合がよかったという事情のお蔭なのだ。結果、被害者感情は残るものの、シビリアンな反省が抜け、米国追従のままの国（フランスのような民主主義獲得のための流血なし、市民の成熟なしのまま、棚ぼたのように民主化された）になった。

日本は「自分達は勤勉ゆえに復興出来た素晴らしい国」と自賛し、中国に対しては見下し目線で、援助し支援してきて、いざ相手が大躍進を遂げると、今度は妬みつつ、けなし毛嫌いし、脅えている。

日本の報道が毅然と、公平を保っているといえるだろうか？ SNS ならずとも、米国になびいた選択をし、偏向しているようだ。中国の躍進や改善にさして触れ

ず、批判的な識者の言や、周辺国への弾圧など、マイナス情報ばかりを故意に取り上げているようだ。

今回のトランプ関税騒動が、「日米は、全くもって盟友関係ではない」と日本を目覚めさせ、冷や水を浴びせてくれれば…。我が国はもっと狡猾に、米中の間を綱渡りをして生き抜いていかねばと、決意させてくれれば…。その方が幼稚な日本には「塞翁が馬」になるかも…おとつと、これも、中国の故事だった。

たかが観光といえども、現地の繁栄は目の当たりにできるのだ。清潔になった街並、露店、コスプレを楽しむポーズをとる若者達、公園でダンスに興じる老人達、観光を楽しむ家族連れ…これが、監視され、縮こまった市民か？ 日頃の報道とはどうも違う…。

看板には見かけることのない日本語、日本人には上目遣いもしない市民…中国は日本など歯牙にもかけていない。きっと「米国に繋がれ、キャンキャン吠えている、マメ柴」と、見えているのだろう…。



《ミャオ族のコスプレ人形》

といった、にわか経済評論はさておき、まずは遠い国から行き、老いるにつれて、近くの中国へ…の遠大な計画は、コロナ禍で中断してしまった。次には、能登半島地震がおきた。その間、知人にも老いが目立つようになり、一方、ネット社会は加速し、ウクライナ侵攻・ガザ紛争・トランプ関税で、値上げが止まらなくなった。何事もスマホ経由に…が加速していく。

あまりに急変貌していく時代と周囲を見るにつけ、できる対処は「行けるうちに行かなくては！」。そんな焦りは、6 月末のスイスの予約だけでは収まらなくなってしまった。悠長なことを言うてはいられない。

チラシの張家界が目飛び込み、「一人でもいい、行けるうちに」と、申し込んだ。アメリカ出発前の、2 月

2日の時点であったが、「第一希望も第二希望もキャンセル待ち」と言われてしまい、スイス行きに近くなり過ぎだったが「5月29日～6月4日」で妥協した。

これで一段落…であったが、そうはならなかった。さっちゃんの発作性心房細動発症、啓子ちゃんの癌発覚で、それぞれがスイスをキャンセルの事態に。

それでも自分は断念する気はなかったが、スイスは元値も高ければ、シングル参加となってしまう場合の、追加一人部屋利用料も高い。

無料キャンセル期限の前日に、トッコさんに声掛けしてみた。彼女は彼女で、2件の旅がキャンセルになってしまっており、「今年はどこへも行けないのかも」と諦めだしていたそうだ。それで突然の高額な話にも嬉々と乗ってくれた。

すぐに阪急に連絡したら、もう航空機手配が完了してしまっている段階であった。しかし宿の確保ができていたこともあり、二日後、追加参加OKの電話が入った。ご縁があるとは、そういうものだ。



《ミャオ族の家屋 芙蓉鎮》

言い訳が続くが…費用については、自分の採配内で、どうにでもできるといえる。加齢につれ、その他の方が、どうにもならないことばかりになる。早めに決心して、早めに申し込み、逆算で準備して、状況を整えていく以外にない。

「行ける」になった途端、てきめん体が動くようになるのには、我ながらあきれる。みなぎるエネルギーは馬鹿にならない。

時間潰し、病気探し、ストレス潰けになるより、行きたい旅にワクワクこそ、アンチエイジングだ。

◆5月29日（木）金沢～関空～上海～張家界

今回の休みをとるために、GWは勤務し通しになった。先月、中国人ヘルパーが退職し、さらに今月はミ

ヤンマーの実習生二人が年季明けで、有休消化状態に。つまりは圧倒的に人手なし状態になっていた。

彼女ら3人がやっていた仕事分を誰がカバーするのか？ただでさえ多忙なのだから、「気付かぬふりをして、先送り」が横行した。とぼっちは、午後2時から出勤の私に掛かってくる…。儒教の教えの長幼の序などはとっくになく（中国人ヘルパーがとんでもないとばかりに「ワタシガ、スルヨオ」になったことがあって、この美德を思い出した）、今の日本人は、働かだけ損！押し付けるが勝ち！が労働観なのだ。

「もうすぐ旅行だもん！行けるんだもん！」に、随分と助けられた。人手不足そのものは解決できる類ではないが、気の持ち方でストレススルーできるのは確かだ。

出発前夜、最後の生ゴミをどう始末する？の難題が、職場の外ゴミ箱に入れていけば済む話…と気付いた時は、笑えた。

何年ぶりかで、近所の取り次ぎ店にトランクを委託することにした。半分を息子の独立工務店にした店は縮小し、老けてきた奥さんの対応はかなり覚束ない。近所にボチボチと古民家利用のゲストハウスが増え始め、デジタル対応も必要になっているはずではあるけれど、「私ら、何もわからんもん」という。結局、集荷時に、ドライバーから確認の電話が入り、「関空扱いはどうのこうの」で、追加料金を払うことになった。細々になっていく一個人商店が、各種デジタル対応に振り回されるのも、大変だ。



《朝食バイキングの麺コーナー》

ともあれ、今回は金沢駅6時発の「つるぎ」に乗る。駅まで早朝につき信号無視で歩いたら、通常35分かかる所、30分で着いた。高校非常勤講師の頃は、暗く寒い冬も、そうやって通勤していたのだった…。

敦賀で乗り換え…これも2回目からは慣れる。北陸新幹線の延伸が、小浜経由になるかまだ決まらない。そもそも小浜駅だけのために地下トンネルを掘りまくるなど、どう考えてもコスパが合わないが、日本は決断できず、すぐ先送りを選ぶ国なのだ。

さあ、京都だ。車内アナウンスが「乗り換え案内をします。『はるか』は、到着と同じ7番線。〇〇は…」昨年、北陸線用ホーム(0番)の続き(30番)だったはずだが?ホームで立ち止まったら、そこにいた職員に切符をチェックされ、「このホームのもっと先です」と、ここでも言われる。

そして、確かに、乗ってきた「サンダーバード2号」に接続できる「はるか11号」は、目の前に停車した。でも送られてきた切符は8時45分発13号の指定席なのだ。たぶん余裕をもたせた配慮だろう…と、開業30周年記念のキティちゃん特別塗装の車両を撮影する。ここで間違いないのだからと、その8時22分発を見送った。



《キティちゃんの特別塗装の「はるか」》

結果的に、私は該当の13号に乗れず、次の15号車となり、集合時刻に遅刻することになった。

種明かしは、通勤通学時間帯の11号までが7番線を特別使用となっており、13号以降が、本来の30番線から発車になっていたからだった。

そんなわけで、次の「はるか」が来るはずと思っている7番ホームへは規定の8時45分になっても、一般回送電車が来ただけで、シーン。おかしい…。

時刻表もないが、柱に巻き付けてある紙には、「通勤時間帯だけの大阪まで650円サービス」が載っており、そこには、はるか11号までが混じっていた。つまり、ここではないのだ!それどころか、次の「はるか」に乗らねば間に合わない!

地下への階段を駆け下りる。「関空方面」を探し階段を駆け上がる。一瞬ホッとしたが、見れば、次の15号は、約20分後などではなく、9時45分発になっていた。完全に遅刻だ! 護身用スマホを起動して、坂本添乗員にかける。「本来の13号に乗れず、15号に乗るので、遅刻します」を手身近に伝えた。

この切符のまま、他の号の自由席には乗れる…を知っていただいてもまだまし。インバウンドはこんなことにも、機敏に対応できるのだろうか?もおお、「慣れる」なんてありえない!せめてこの後は、添乗員にぴったりくっついていなくては…。

信号待ちもあった15号はようやく関空につき、4階国際線出発ロビーへ。まず右端へトランクを受け取りに行き、次に左端の集合カウンターに向かった。ターミナルは広いし、結果的に集合タイムには30分遅れになってしまった。

向こうから、すぐ私と判った坂本Tは手を振り、「空港でも迷っているのかもと、電話しようかと思っていました」と言う。詫びながら、内心、(私は迷い足を一歩たりとも踏んではない。あのアナウンスを聞いたばかりに…)とむかついたが…よしとしよう。そして「この後はGカウンターで手続きして下さい」で、別れる。

そのGカウンターが、行けば、「後ろ側のカウンターです」と言われ…、ぎっしり並ぶそこについて、念のためと、フロアスタッフにチケットを見せると、「MU226なら、向こう」と言われ…、出国審査では「日本人専用」と書かれた窓口が付くと、「一般窓口の方で」と指示された。他のみなさん、何を見たり、聞いたりして、行動できているのでしょうか?



《宝峰湖》

そうやって一人のみでの進行だったから、まだ同行

者はどなたか？一切わからない。13時25分、離陸した。マイナス1時間に時計を直す。アメリカには4つの標準時があるが、同じ広さの中国には、1つの標準時しかない（つまり、国内だけで、実質4時間の時間差を抱えている）。オンラインの時代には、その方が適していることにはなる。

さて、2時間の搭乗で上海に着陸し、うろうろと広い滑走エリア（浦東）を20分走って、到着。

最初に発熱チェックゲートがあり、そこは単に通過するだけ…のはずが、なんと添乗員がひっかかってしまった。彼（40代、独身）は直前のフランス添乗で30人を引率し、血圧もあがり、かなり疲れていたらしい。ともあれ、デジタル計測で37.7度、耳穴計測で、37.0度、別室に連れていかれ脇下で36.5度となり、ようやく解放されたのだった。

客達は「私より先には行かないでください」と指示されているし、そうしかできない。それが、本人はどこかへいなくなってしまうし、一方、ヒステリック職員は「さっさと進め、たむろするな！」らしきを喚きまくる。「添乗員と離れるわけにはいかない」を伝えるも、職務であろう「ここを塞ぐなど言ってるでしょ！」らしきを叫ぶ。我が職場のあの中国人も、指導しようとするすぐ怒りだす…とみんな手を焼いていたが…。「ここは中国！」としよう。

幸いにも坂本氏は解放され、このいきなりの災難に、メンバーは一気に結束モードにもなったようだった。

次には、ここで出入国カードに記入して…となったが、「パスポートを見て」や「宿泊場所をどう書く？」にザワザワ。あげく「私のパスポートが無い！」の一騒動が起きた。他の人のパスポートも一緒にバッグに戻ってしまった人がいたのだ。尋常ならぬ緊張で、いろいろがおきる。

6年前の上海入りに比べたら、入国手続きはさらにすっきりして、機器は当てるだけに電子化され、言語変換もされ、スマートだった。3カ月前のロスアンゼルスの方が、よほど横柄で、待たせ放題で、ぶらぶらと急ぐ気配もなかった。

だいたい、こちらの看板には、中国語、欧米人向けの英語、最大顧客の韓国語が並ぶ（その下に日本語があるのを見たのは、1回きりだった）が、米国は当然に英語のみだ。

すべてに「アメリカファースト」で、観光客への気

配り・歓待の笑顔など微塵もなく、驕り切り、疑いまくり、切り捨てまくっていた。

二大大国のアメリカと中国…いろいろな要因があるだろうけれど、私は、長い歴史を重ね、屈辱を味わい、老獪そうな中国に、将来の軍配を上げておく。



《一緒に写真を撮るのは一元》

ここからが、長い乗り換え時間だった。2時間で上海に着けても、その先の上海～張家界便は20時25分発の1本しかないのだから、ただただ5時間待ちに耐えねばならない。

「待機時間対策」の本も読み終えた頃、端っこターミナルの人影も薄れ、残りはつまるところ、今回のツアー客ばかりと判ってきた。「金沢から」と、「今回については一人参加」「もとは、山トレッキング三昧」の紹介をし、隣の姉妹とぼつぼつしゃべりかかる。

N姉も、山趣味だった。でもスノボーにぶつけられ半年の入院、復帰してまた膝骨折もやり、山道具処分を始めているという。旦那とは喧嘩しつつも、自由に海外旅行に出るといい、反対に旦那とべたべただった妹さんの方は10年前に夫を亡くし、ようやく立ち直って一緒に海外を楽しむようになったという。

その向かいに座っていたカジュアル系と言うか、原宿系というのか、帽子にロン毛・サングラスの旦那と妻も、話し始める。まずは、カードや支払いにどんな対策をやってきたか？だ。芸能関係系か？リモートワーク系か？の夫婦は結構海外に出ていて、中国や東南アジアなら、アリペイが万能と言う。N妹は、カードをスマホに入れようとしたら、入らなかった。年会費を10万円も払っているのに、ラウンジに入れなかった…などと言っている。プラチナカードのことか？えっ、これってハイソなツアーだったっけ？いやいや、ビジネスクラスなどは設定されていない。7日間で、259,800円なら、国内旅行より安いかも…のあたりだ。

大阪弁というか関西弁は、おっとり金沢からみれば、一秒たりとも頭にも腹にも留めてはいないようなけたたましさ…それぞれ、高槻、奈良、四国讃岐、京都、大津あたりとも判ってきた。



《袁家隈の猿》

「一人参加になった」私の言い訳を聞いた 83 歳さんは、「私は心房細動で救急車に乗ったのが 3 回、それに糖尿病に、逆流性食道炎に…」と 6 種をまとめた薬を見せてくれ、大病のたび痩せて二回りは小さくなってしまったうえ、踵には 11 本のチタンのボルト入りとのことだった。彼女はいきなりからして「(友人をさして) こっちは一人、私も一人や。旦那は保証人になっとなったからなあ、私の資産を守るために、離婚になって。そしたら、さっさと逃げていきよった」と漫才を聞いているようなさばけぶり。このさっぱり言動と同様に、動きもシャンシャンで、みんなが「それで 83 歳！」と感心するくらい元気だった。

食事は円卓であったし、漫才のような関西弁の中では全然孤立しない。結局年齢層も一緒だったし、初回から張家界へ行こうになるはずもないのだから相応に旅三昧で、興味を持つあたりがどこかは共通していそうだった。中国語教室での友人ペアや、妹の方が中国語を選択していた…もいて、通訳を頼んだりもできた。中国語が出来なくても、元気印さんは、強引に「半分だけ」や「値下げ」交渉を身振り手振りでやっていた。旦那方も、すでに妻を従えるタイプはおらず、スマホになじんでいる妻を旦那の方が立て、次には旦那同士での会話も弾んでいた。ツアー中に誕生日を迎えた人が三人いて、お祝いしたことも、親しくしたし、一方、集合時刻の 5 分前には必ず集まっているようなメンバーで、手がかからなかった。

私の方は、はぐれるわけにいかないし、しっかりメモもしたかったので、ぴったりガイドにくっついてい

たが、それでのスタスタ歩きが「えっ、74 歳？なんか筋トレやってる？」と感心されもした。ともあれ、一人での孤立も緊張なく、久々の人物ウォッチングも楽しめたのだった。

2 時間乗って、焼きそば機内食（夕食。なお、こちらでの「機内コーヒー」は、最初からミルクコーヒー）が出た飛行機は、22 時 40 分着。張家界はもう深夜だったが、綺麗な空港で、トランクも無事出てきた。通路には、天門山、アバターで見た石柱林、美しい少数民族などの写真パネルが並び、期待が高鳴る。



《天門山の写真パネル》

優しい中年、現地ガイドのハンさんが待っていた。乗り込んだ小型バスが「ビー、ビー」とやかましいのは、安全ベルトを締めるまでは鳴り続けるシステムになっているからだった。2 時間越えると、ドライバーに 20 分の休憩を厳守も含め、これが監視社会なら、事故を未然に防ぐ、合理的なシステムと思った。

彼は 2012 年に神奈川県の新潟大を出て、サラリーマンのあと、帰国。ガイド業になつたらしい（9 歳の娘がいるなら、40 代？）。新型コロナが武漢発とされたこともあってか、中国への不信感は根強く、小松～上海定期便の復活もとりわけ遅かった。日本語ガイドも干されて辛かっただろう。彼は韓国語もこなしているようで、「韓国の人は山が好きですから、5 回でも、6 回でも来ます」とも言っていた。

ガイドは 1 万円＝470 元の好レートで両替してくれる。いつもそうなのだが、それはあくまで便宜の範囲であって、パンフレットに書いてはないし、添乗員が入国前に教えることもない。さらにそのレートで、再両替もしてくれるそう。私は、また中国に来よう、小松～上海便のツアーを便利に使おうと思っていたから、そんな夢を持って、毛沢東札をかかえていよう

と思う。

空港から北へ30kmに武陵源区があり、その中心部にあるプルマン張家界は、五つ星ホテルで、シングルの私は最上階の7階のツイン部屋に3泊だ。6泊をシングルにアップが、たったの5万円…安い。あすはまず晴れの予報。緊張した疲れはあるものの、時差が1時間しかないのも、身体が普通に楽！高齢者に中国は優しい！

◆5月30日（金）索溪峪自然保護区、ガラス大橋

さて、張家界を、私はやはり映画「アバター」のモデルとして知り、次にはグレートネイチャーの映像で石英砂岩の石柱地帯と知った。さらには袁家界の、楊家界ので、いくつかの似た地域がありそうだ…までが知識。

まず中国の面積は日本の25倍で、アメリカと、ほぼ同じ。そこに14億人が住み、92%が漢族で、8%を55の少数民族が占める。私達が想像する中国人は、清国の満州人や、相撲で見る蒙古人、そして毛沢東だが、漢族そのものは手足が長く、癖のない美形（韓流スター系）だ。言語は、漢語の中の北方方言を主体とした「普通話」で、さらに方言を併用している。少数民族の言葉は、ハンさんもわからないようだ。南部にある洞庭湖の南側が湖南省と呼ばれ、6700万

人が住む。三方を山に囲まれるが、それは独特の地形で、息をのむ景観が揃い、そういった自然の美しさに、民族の多様性や、少数民族の文化や料理もあいまって、アジアの「旅行天国」の一つとされる。かつて元の支配下にあった東南アジア圏には中国はなじみのある陸続きの国であり、貿易交流も多く、憧れの旅行先になっているようだ。

湖南省の西部にある張家界市は、人口170万人で、中心部にある武陵源が1992年にユネスコの世界遺産に登録された。広い武陵源風景名勝区エリアの東に、武陵源ゲート、西に森林公園ゲートがあり、さらにエレベーターやロープウエイで高台に上がる。中にいくつもの〇〇景区（張家界国家森林公园、北部は天子山自然保護区）が含まれ、それらの間をシャトルバスが結んでいる。私達が3泊する麓の武陵源市区は、武陵源ゲートのすぐ東にある街で、南には宝峰湖、東には黄龍洞（以上が、索溪峪自然保護区）、もっと東に、大ガラス橋がある。

空港近くのあたりの永定区の方が鉄道駅もあり、張家界市の中心部で、そんな街中に、天門山ロープウエイの麓駅があり、7km南下した先の屏風のような天門山まで30分で運んでくれる…。

さて、6時半からのホテルの朝食バイキングは、カードキーのチェックを受けて、入場。上海の時のよう



な、麺コーナーがある。4種ほどの麺に茹で野菜を乗せた丼が並んでいて、そこから選択すると、麺を温めてくれ、その後スープ、肉類トッピング、さらに辛味や漬物を乗せる。他はお粥が3種、定番の洋食、中華系総菜に、キムチ、フルーツ、2種のヨーグルト、各種ジュースにお茶。菓子パンに、シリアル。

元気印ペアと同席する。韓国観光もよく行くらしく「キムチがおいしい」の「麺にはあれとこれと、酢もちょっぴり足すと美味しい！」との解説。金沢にいたら…いや、偏屈旦那好みの和風料理ばかりを作っていたら、私の味修業は、どうにもならない。

つい、3か月前の、モーター宿での、菓子パンにコーヒーにヨーグルト程度だったアメリカの朝食を思い出す。あれは「餌」のレベルだったと、ここでも中国に軍配を上げた。アメリカが先で、中国が後…の旅行順で良かった…。これが反対だったら、食の不満でいっぱいのグランドキャニオンになったような気がする。

「トイレが詰まってしまった」の訴えがあった。中国では、紙は流さないのが普通なのだ。山トイレもそうなのだが、心して、ゴミ箱を目の前に置き、心して用足しするとしよう。

深夜着のため昨日は確認できなかった奇岩の山々が、ホテル前からもう見えていた。街路樹は、タイサンボクで、ちょうど花盛りだった。



《ホテルからの奇岩群》

索溪峪（そけいよく）とはトゥチャ族の言葉で「雲と霧に囲まれて、山と峪に隣接する山村」の意味。

「明日から、お祭りで、三連休が始まりますから、もしかしたら、シャトルバス乗り場で待たされるかもしれません。分かれて乗ることになるかもしれません」の祭りとは、端午の節句のことだった。「日本にも…」

と言いかけて、そうそう七夕だって、織姫彦星は、中国の扮装だった…これも中国文化からだったんだ…。

乗換場は、トイレと土産物売り場になっていて、さっそく物売りも近寄ってきた。黄色のひよこや赤いハートの髪飾り？そしてパチンコなどのおもちゃ。こんなちやちなのを買いたいのか？だったが、後で、交差した舟の乗客がみんな黄色のひよこを頭につけていたのにはびっくり。私の方が堅物なのかも？

ともあれ、パーク&ライド方式というのか、車両類を平坦部に待たせて、そこに博物館や土産物店やトイレなどを設置し、そこからシャトルの電動カーに乗換えて現地へ入り込む…が、自然保護区へのアクセスなのだ。



《宝峰湖での遊覧観光》

でも、たっぷりジグザグ柵のついた乗り場は空いていて、すぐシャトルバスに乗れた。すぐ到着した宝峰湖の舟着き場からは、貸切の遊覧船で出航した。ここは少数民族にとっての水瓶に当たる人造湖。桂林の漓江下りの時のような山々…正確には向こうは石灰岩で、こちらは石英砂岩でもっと切れ込んだ岩肌が出ていることになるが、山水画そのもの。ことさら誇張したわけではない。そそり立つ岩に生い茂る樹々、からみつく蔦…乾燥したグランドサークルでもなく、冷涼なアルプスでもなく、天水に恵まれた東アジアだから、「山水画」となる。標高300mのここは12~2月には雪が降り、それも絶景だという。右に鵜飼いの竹舟が2艘出ている、それは観光客の撮影用。ちょうど、大きな魚を捉えたところだった。大喝采をしてあげた。次には左に優雅な舟があつて、歌姫が少数民族の唄を甲高い喉で披露するのだった。高台には異民族の若者が逢引きに使ったといわれる橋がかかっていた。岸壁には長いジグザク階段もついていた。水上舞台があり、パフォーマンスが見られる観光もありそうだった。



《宝峰湖での鵜飼い》

湖の半分ほどをぐるっと一回りして戻る。今度は後ろの山並みが見えるようになり、蛙岩というのが、口を開けた蛙の横顔と判った。船頭の娘も、甲高い声で別れを惜しむ歌を披露してくれた。観光地に人は数多く働いていて、誘導や監視や掃除にあたっている。浮浪者や、怪しげな暇人などは見掛けず、統制経済の長所といえる雇用が割当てられているように見えた。

シャトルバスで戻ったうえで、徒歩で坂を少々引き返す。ハンさんは、岩肌を差し、これが石英砂岩という張家界独特の岩質であり、世界自然遺産だけでなく、世界地質公園にも指定されているという。よって植物は 300 種、動物は 200 種と豊か。まず市の樹としてハンカチノキがあり、それは 4 月下旬に、ハトのごとく群れ咲くし、生きた化石と言われるメタセコイアも見られるという。その先に、岩の途中から流れ出している滝が見える広場があり、オオサンショウウオを飼う公園もあって、30 分の自由時間がとられた。

女性の頭にキラキラ輝いているのは少数民族の冠だ。その娘と一緒に写真を撮れば 1 元、衣装を借りて着用し、写真を撮れば 30 元になるのだった。それはレンタル店のノート PC にすぐ転送されて、データ販売となる。背景はこの滝だけではなく、武陵源の石柱群に変更することもできた。



《レンタル衣装で記念撮影の例》

日本では細々と生きる特別天然記念物のオオサンショウウオは、こちらでは実に悠々と、どこにでもいるようだ。さらには、養殖されていて、名物鍋料理になっている。そういえば、坂網猟で珍重される稀少なトモエガモは、韓国ではありふれたカモということだった。土地土地で稀少度は変わるものであり、かつ、滋養溢れる食材ともなる。

ちょっとした社前には、赤いお札が大量に下がっていたり、お香の台があったり。読めないが、八百万の神がいるのも、中国文化伝来か？

ゆっくり戻ると、乗り換え場所には、飛び出たお尻と芸術的に編み込んだ髪の毛、黒人の一群がいた。早くも、赤いハートの髪飾りをつけて喜んでた。売れるから、物売りだって待ち構えているわけだ。



《駐車場には物売りが》

次にはショッピングで、箱物施設に停まる。こんなには、上海ツアーでも桂林ツアーでも、慣れたぞ(中国の観光施策として、数カ所の土産物店を組み込むことが、義務付けられているらしい)。

定番、シルク寝具の説明が始まった。今回は緞子より高級な、錦の側のシルク蒲団が 68,000 円。続いて竹繊維の説明。抗菌成分が多く、臭わず、健康的。続いて、トルマリンを仕込んだ、健康器具…首ベルト、腰ベルト、膝当て。実際装着中、首ベルトの後ろは、ヒリヒリするくらい熱くなった。そうなるのは、効いていて、疲れが溜まっている証拠でもあるそう…そうかい！続いて、セットならいくらにする、これともセットならいくらに…の安売りが始まった。張家界に来るような人は中国が初めてはいないから、恒例行事とばかり、みんなノリの悪い顔をしていたし、販売員もそのあたりとわきまえているようだった。でも、消臭下着を購入した人がいた(元気印さんだった)。

トイレに行く通路の途中には、説明用小部屋がいく

つもあり、寝具の柄が、韓国人好みなど国別に変えてあるようだった。

ようやく解放され、川岸のレストランの3階で昼食。入口の生け簀に、養殖サンショウウオがいて、肉を燻している作り物もあった。次々と出てきたのは、10皿ほど、飲み物はコーラが5元、チンタオビールが30元。私は元気印さんと、毎回1本を注文し二人で分け、支払いは交互に担当するとした。

私達は張家界の名所をあちこち回るやり方だったので、最初は珍しかった「郷土料理」も、次第に見慣れていくことになった。今では日本人用には、辛味を控えているとのことで、唐辛子などは、トッピング用の別皿で添えてあり、優しい味付けばかりだった。



《品数豊富な郷土料理》

メニューは、鍋物が2~3種、川魚の姿煮、鶏のから揚げ、豆腐のあんかけ、肉と野菜の炒め物、木耳と肉の炒め物、野菜のオイスター炒め、冬瓜の炒め物などに、蒸しパン、ご飯、スイカ…。時々料理の説明をしてはもらえたが、刻まれとろみがかかけられていると、どの皿のことかわからなかった。それより、碗と皿が各1しかもらえないから、円卓を回しつつ、確保して皿に積み上げていくと、いったいどの料理を確保済みなのか、自身もがわからなくなってしまう。

「トイレを済ませたうえで、店の前に〇時に集合」の店の前には、果物の量り売りが来ていた。魅力的な南国の果物…。とげとげのミニラグビーみたいのを、Q氏が買って食べている。緑のゼリー状に包まれた種が詰まっているようで、「お味は?」「…なんとも…言い難い」そうだった。

河岸には雑貨の露店が並んでいた。ハンさんがいてくれたので、みんなで纏め買いを交渉し、「6個でいくら」になったので加わり、いつものマグネットを10円でゲットとした。こんな石柱が見えるんだろうか?

ハンさんは「明日は雨ですが、ちょうど雲海が見えるかもしれません」と言う。N姉妹は「いつがベスト?」を旅行社に聞いて、4~5月の雲海が見られる時…と聞いて、選んだそうだ。山水画の国は、くっきり丸見えより、雲海たなびく景色をベストとしているらしい。

東の大峡谷玻璃大橋までのドライブが、やや長く(20km)、ハンさんは明日の夜のオプションの説明を始めた。

少数民族ショーは、それぞれ一流有名人が総監督を務め、音楽監修をしたもの。文化、歴史伝説と現代舞台芸術を融合した大型の民族歌舞パフォーマンス…とある。トゥチャ族、ミャオ族、他5大民族の風情を表現し、内場の舞台劇と、外場の篝火パーティー(雨の日は、自動キャンセル)の2部構成だ。

哭嫁(なきよめ)は意に染まぬ結婚への抗議の唄、戦死して魂が故郷に帰るゾンビー(キョンシー)の話、「追愛相思楼」という、ロミオとジュリエットのような登楼求婚の風習などが、アクロバットや歌舞になっているらしい。会場はホテルの隣で、夕食後に希望者でまとまって行くという。300元(6,000円)だ。



《世界最長のガラス橋》

40分ほどで、大橋に着いた。それはどこから、遠望で見える立地ではなく、その前にある前衛の巨大な建物で隠されている。昨年の9月に完成した世界最長のガラス橋は、日本のニュースにもなっていた。全長385m、幅6mの吊橋には100枚のガラスが使われ、300m下の谷底を透かし見下ろせる。例の靴カバーをつけて、外へ出ると、まず擂鉢状の階段スペースがあって、そこから見下ろす位置に、ガラス橋は架けられていた。

その先は行き止まりであって、あくまで観光用。左に見えるエレベーターは、別のルートから入り利用するものであり、さらに大渓谷を跨ぐジップラインが稼

働している。到着地点から、へばりつくようなあの栈道を伝い上がってくるのかと思ったら、到着地点からは次の観光地に向かうようになっているとのことだった。橋の真ん中の下に、バンジージャンプ（260m 世界最長）のスペースがあり、一人がスタンバイしていた。ブーンと音がして、ドローンが正面にホバリングした。降下中の録画もセットしての娯楽なのだ。確かに、固定カメラが真下に見下ろすだけでは、空中ジャンプがどう劇的なのかは分かりづらい。

橋の上は、テレビで見た通り、寝そべったり、ポーズを取ったりの撮影三昧。そして、手前に大集合して歓声をあげて記念写真…も、よく見られた。ふた昔前くらいの社員旅行の日本も、そうだったかも。庶民の思う幸せや、豊かになった満足は、経済が上昇中の時に、最大化するのかもしれない。

こちらの崖にも、あちらの崖にも、へばりつく栈道は見たが、それぞれが行き来のできない、自給自足で生きてきた不便な地帯だった。それが観光用のガラス橋が架かれれば、大観光地になり、スリルスポーツのメッカにもなる。多くの雇用を生み、金が落ちる。開発が後になるほど、最新技術が、不便を観光絶景に一変させてしまう…それが、張家界エリアなのだ。ともあれ、不便な地に追い込まれ生きることになった少数民族同士（70%がトゥチャ族、30%がミャオ族）は、やっとの自給自足だったから、争うことなく過ごしてきたらしい。さらには、その料理、衣装、踊りも観光資源とみなされ、大観光地への整備が抜群に進められているようだ。

やや戻って、今度は鍾乳洞の黄龍洞。次第に蒸し暑くなってきたが、1.5kmほどを歩くという。まず屋台の並ぶ長屋通りを延々と、次に橋を渡って広場へ。そこには、しゃれこうべを抱えた猿の像があった。何？だったが、ここの整備のため、約3分の2の樹が切り倒され、「自然を破壊する人間は、自ずから破滅の道を進んでいるのではないか？猿より劣っていないか？」と警鐘する像なのだという。今さら…破壊してからこんなのを立てたって、贖罪にもならないであろうに…。

ここでトイレを済ませ、さらに田園風景の中の瓦敷の長い通路、さらに登り階段…これだけの距離を年寄り観光客が歩いて来られるのか？最新設備にしては、気配りがちぐはぐと思うが…。

こんな前哨戦のため 汗だくになって、ひんやり洞

窟内に入った。赤・黄・青・緑…グロテスクなライトアップは、瀛江の時と同じ、「観音」や「虎の頭」や何かと見立てているのも同じ。ここは1983年に発見され全長60km、最も高い場所で100mあり、世界一広い洞窟と言われている。広いゆえに、徒歩エリアと地底河ボートエリアもある。



《洞窟内でのライトアップ》

ボートエリアは…自分のわずかなプレイランド体験ではディズニーランドがこんな仕掛けだったと思う。流れにそって、ライトアップされた石筍群が広がり、ドラゴンが映し出され火炎を吐いたり、天井に星が瞬いたり…。広いのは判ったが、故意に作り込み過ぎても、さて？ではあった。

また、長い通路を歩いて戻り、バスに乗車10分でホテルへ。1時間後に再集合して夕食レストランへ…だったので、シャワーを浴びてしまう。

観光地の広い施設内を歩いて歩いて、19000歩を越えてしまい、汗びっしょりだった。今日はスタスタ歩いて歩けたけれど、普通の旅の標準はこんなもの（歩く度2とは書いてあったが）？詳細がわからない分、早めに出掛けておかねば！と、さらに思うわけだが。

レストランは、竹筒料理とのことで、お皿の替わりに上部を削いだ竹筒に、料理が盛り込まれていた。

配膳ついでに出てきた料理人おじさんに、中国語でしゃべり始めた二人がいて、びっくり。ここで、その二人は中国語教室で知り合い、現地修行に出てきたペアと判った。韓流映画で韓国語熱が高まったように、中国映画にも填まるようなものがあるらしく（ちなみに明後日の芙蓉鎮は『芙蓉鎮』という人気映画があるそう）、都会なら、中国語の看板で十分に集客できるのだ。中国語は「いここ」だけでも、父方か母方か、年上か年下か、男か女かなどの区別で16種もあり、翻訳が難しいと聞いたことがある。そんなことは無視して、

会話の場合は豊富な子音を使い分けできればいいんだらうな…。



《袁家隈の天下第一橋》

旅の最後の頃に、彼女達の片方は元看護師、もう片方はリタイアした後に訪問介護士職と判った。どうやら女性の方が、男性のように過去にしがみついたり結果にこだわったりせずに、気軽に方向転換ができるのかも？とも思ったどちらにせよ、行動を起こし、納得できる時間にする方が「勝ち」(?)だ。

明日の予報は、24度、雨。

◆5月31日(土) 袁家界、天子山、舞踊ショー

エレベーターで下りた中庭の池は、雨の輪が広がっていた。その先には「足浴」棟があり、足ツボマッサージは1時間200元のOPになっている。

今朝も同席した元気印さんは、昨夜それを頼んでいたの感想をきくと、「気持ちがよくて延長で、全身をやってもらったわ。頼めば？」と言う。言葉が通じないし(二人で行動の元気印さんとは違い)、一人で行くのも、一人部屋に呼ぶのもどうかな?と思い、止めておく。

昨日食べそこねたメニューを選び、はちみつ入りかな?の赤いヨーグルトも食べ、さて、部屋へ。部屋前で、あれ?カードキーがない!朝食時はショルダーバッグのみだし、触ったのはあの時だけ…おそらく…と、朝食会場に戻り「3718」と告げたらカウンターを指さされ、そこにあった!バーコードチェックだけでよかったのに、朝食券のように渡してしまい、そのまま入場していたのだった。もおお、旅の終わりまで、緊張していなくっちゃ!

今日はハイキング初級。それは1km、1時間、標高差100mとしてある。24度で雨で…なら、蒸し暑いに

決まっている。雨覚悟の出で立ちは、各自、カッパに、靴カバーに、いろいろ。「アマゾンで至急取り寄せた」…とか、いろいろあって、かえって私の方が、本格登山でもないし?になっている。ゴアテックスレインスーツと着替え用Tシャツをザックに入れ、さしあたり、傘を差すとした。

すぐに着いた武陵源ゲート近くで再度確かめたら、昨日聞いた「武陵源は団体だから、シャトルバスを貸切れます」が、1台をずっと貸切という意味ではないと判明した。区間ごとにシャトルバスを乗り継ぎしていく形態であり、団体なら貸切で一台を呼べる…であって、私達が解釈した「貸切なら、荷物をバスに置いたまま動ける」ではなかった。意味が通じていなかったと知ったハンさんは、「持てない荷物があったら、私が運びます」と言ったが、みなさん、なんとかいつものこのバスに置いたままにしていくものと、持つて上がる荷物を仕分けして、下りた。

街並みを通り抜け、ゲートに着いたら、物売りが、ビニルレインコートも、傘も、シューズカバーも、10円で売り歩いていた。雨なら雨での商売がある。200円…安い。



《雨の武陵源ゲート》

その入口は大広場になっていて、スタバやケンタッキの店も並んでいた。この場所で、演舞が行われたり、夜になると老人たちが現れてダンスをしたりとのことだった。どちらにせよ、豊富に使われている石材がつるつるで滑りそうで…自分は、こっちが気になり、シューズカバーなんてとんでもない…を思う。しかし、かぶせている人は多いし、ピンクや黄色や水色などのレインコートで賑やか。今日から端午の節句の休み…があるのかもしれないが、観光客であふれていて、監視社会の、統制経済の…は、どこの話?だ。

そのうえ、団体客は、別扱い。ゲートの端をすり抜

けて、ホールへ。そこにあった石柱群の大壁画は絵具で描かれたものではなく「砂絵」だった。2年がかりで、岩や砂を貼り付けて仕上げたものなのだ。質感はより実物に近いし、立体感もあるとなる。

優先的にシャトルバスに乗車。索溪湖の脇を走り、百龍エレベーター麓駅へ。もう石柱群の真ん中に入った。それらは雨のお蔭で、ガスにぼうっと浮かんでいる。群衆はさらに左の、ジグザグ階段を上ったエレベーター口をめざしているが、私達は「団体」ゆえ、水平移動して、そこまでのミニエレベーターの方に乗れるのだった。団体専用の民族服案内嬢がついて、リードし、ペットボトルも配布してくれた。



《端午の節句のサービス演舞》

上がった先の広場には、二匹の黄色い獅子がいた。端午の節句を祝う演舞のサービスに丁度立ち会えた。雨の中なのに、回転技も決めた。エジプトでもアメリカでもチップを強要があったので、おねだりなしで、踊ったらさっと引き上げてしまう人達がとても潔く見えた。節句の出し物のそもそもは、神に祈ったり感謝だったりだったのだろう。「アメリカは損ばかりしてきた」という駄々っ子のようなトランプに比べ、アジアの敬虔や謙遜はやはりしっくりくる。



《百龍エレベーター前の景色》

続いての百龍エレベーターは 326m を、88 秒で上

がる。暗闇の中を 30 秒、出てから後の時間がシャッターチャンスという。それはあつという間だったし、雨垂れガラスでは見えようがなかった。でも、出てすぐに展望台があり、下の広場で見上げた岩々を、見下ろすことができた。ハハハ、またガスだよ…だったけれど、そのガスがずっと流れたり、濃くなったり。中国って、東洋って、これでいいんだ…とも思った。民族服お姉さまのエスコートはここまでだった。

その先に、「袁家界」と掘り込んだ石碑があった。これからいくつかのエリアを見るが、ハンさんはこの袁家界が一番見応えがあると思っているとのこと。標高 1000m の高台は、平らな公園で散策路が伸び、崖寄りに、幾つかの展望台がある。交差用の小道が併行している部分もある。そういう安全な所には屋台が出ていて、よくあるのは真っ黒な臭豆腐と言うもの。毛沢東の大好物との説明だが、みすみすお腹の不調をやるわけにもいかず、写すだけとする。



《毛沢東の好物 臭豆腐》

まず迷魂台へ。ぎっしりの人の向こうはガス。それがずっと流れて、石柱群が見えた。みんなスマホを掲げて撮影している。「私が雲海を見られたのは、今年初めて。よかったです」とハンさん。まあ、それで当たりの内だったようだ。右手には、人でぎっしりの展望台や栈道が見えている。その場所ごとに、石峰林や、石柱（乾坤）などの説明板がある。説明部分は読めないが、名詞としての漢字は読める。そう、漢字は中国からなのだ。武陵源全体が、「アバター」のモデルだが、足元が細めになった石柱が特に、そうと言われるらしい。鉄橋では真横に、迫力で見えた。天下第一橋は、中空に浮く自然の石橋だが、木々がかなり茂っていて、迫力は半端になった。そこから崖縁を離れて、内側の道へ上がる。その建物が公園内の団体屋食場所だった。私達が特別なメニューということもなく、どの団

体のテーブルにも、同じメニューが並んでいた。



《映画アバターモデルになった石柱》

そこから、シャトルバスを呼んで、天子山自然保護区側へ。台地には何の変哲もない平らな野原部分と、浸食の進んだ部分があって、所々にあるバス停でシャトルバスを呼び、次のポイントに移動するのだ。

最初の賀龍公園でのレリーフには臥龍という革命家が、少数民族を懐柔した偉人…のように描いているらしい。天子閣でトイレ休憩をしたが、突端のここは左に、鉛筆のような御筆峰があり、右に花籠を抱えたように見える仙女献花が見える所。御筆峰はガスが切れて見えたが、仙女の側は濃いガスで、見えなかった。グレートネイチャーでは、これらをドローン撮影にしていた。現地へ行っても柵から見るしかない限界があるが、実際はそんな立地だというのは、行かねばわからない。



《天子山自然保護区の御筆峰》

そこからの下山は、下りて、下りてのあげくのロープウェイ乗り場であった。やはりちぐはぐ（ロープウェイが高度な割に、そこまで車椅子を押していけるような斜度にはなっていない）な印象はもった。乗り込んだ天子山ロープウェイは、絶景の石柱の中を降りて行くはずだったが、ガスはさらに濃くなって、奇岩の傍を通り過ぎる時だけ、岩がボウツと見えた。坂本さ

んが、「天気だけはどうにもなりません。たとえばオーロラのツアーなんて、どこへも行かず、ひたすら4日間空を見上げているだけなんです。4日目、やっとオーロラが出たけれど、雲が湧いてしまい見えない…それで終わったツアーもありましたよ」と、慰めてくれる。

そこからのシャトルで、最初のゲートに戻った。疲れたこともあり、通路の土産物店の、実演の叩き固め飴の試食が美味しかった。ハンさんが値下げ交渉をしてくれたので、ほぼ全員が買った。

夕食は、ホテル内のレストランで取り、舞踊ショーを見る7人は、19時にロビーで再集合となった。こんな時、一人ゆえ、早めに下りて行くと、ハンさんも、坂本さんも、玄関先でたばこをスパスパやっているのだった。

雨はもっと激しくなった。会場が隣だからいいが、それでも濡れる。7人のうちではなかった、中国語を使える二人が、先に行くのが見えた。彼女達は、自力で手配し、165元の席で見たそう。なるほど。

1500人収容の座席はいっぱい、ミャオ族衣装の女性が、所々に案内係として立っていた。私はコロナ前の2018年に上海、2019年に桂林で、この手のショーを見ている。どちらかといえば、泥くさく見えて、それはシルク・ド・ソレイユや、よりアクロバティックになってきた新種競技に目が慣れたせいかと思った。それが今回は、テンポ早い群舞になり、照明効果も洗練されたなあと思った。



《少数民族の舞踊ショー》

真似る気があれば、今ではどれだけでも情報をとれ、というのが人気かは分かる。見るだけの側は楽だ。現在進行形の人達には、比較され、すぐ流される厳しい時代になっているなあとも思った。

野外編は自動キャンセルになっており、流れに任せ

て外へ出て、ホテルに戻った。三連泊の五つ星ホテルも今宵限り…ゆっくりバスタブに浸かった。

◆6月1日(日) 工芸館 芙蓉鎮 リニアカー
南方長城 鳳凰古城

3種の粥は毎回変わり、本日は黒米粥を頂く。蒸し物も全品制覇した。久しぶりに、バスにトランクを積み込んだ。

まず近所の工芸館からだ。お馴染み龍の息子のピシユーが迎えてくれる。ピシユーには肛門がなく、財宝が溜まり放題になる縁起物だという。そんなの矛盾！溜まるどころか、使わせ放題にする施設でしょ？



《龍の息子の縁起物ピシユー》

インターンだという、まだ日本語怪しげ女性が説明につく。陶器、貴石細工や、翡翠の玉衣、干支の置物、何かと逸品が並んでいる。何でも縁起担ぎの説明がつき、「亥なら私や」になって干支(年齢)も結局バレていった。でも、皆さん、物より事(体験)が大事と思うから、こんな旅に出てきているはずだ。真珠の説明にいき、真珠クリームも出てきて、毎度のフルコースやなあ…と聞き流しているうちに、ノルマは終わった。

110km 南西に移動した先が芙蓉鎮。「鎮」は村の意味だ。そこへの高速道路の途中で休憩を取ったが、私達のトイレのため用というよりは、ドライバーにとるべき休憩があったためだ。これだって、監視社会のいい面の方で、安全につながる。

道中、まだまだ貧しそうな農家が見え、沖縄の墓に似た、大きな墓も時折見えた。

阪急のツアーインフォメーションには「芙蓉鎮 湖南省湘西永順県王村の中にある古鎮。2000年の歴史を持つ古い街で、現地の観光化された場所から路地裏に入ると、石畳の続く先に歴史ある建築物や地元の人々の情緒あふれる生活風景を目にすることができ

ます。」とある。

今調べると、映画「芙蓉鎮」は文化大革命を描いた映画で、批判的な内容にも関わらず中国のアカデミー賞4部門を取ったらしい。ここは、その映画のロケ地として有名になったため、村の名前の方が芙蓉鎮に変えられたという順なのだ。



《中国のアカデミー賞をとった「芙蓉鎮」》

私は今も金沢にどうしてインバウンド達が来るのか？よくわからない。そもそも、そこが生活圏の地元民には観光地の視点がもてないものだが、「金沢カレー」も「金沢おでん」も突然出現し、食べたこともない「のどぐろ」も名物魚になった。観光化が加速していくのに戸惑いつつ、錆びれるよりは良し…と眺めるまでである。

ちなみに、住みにくく持て余されてきたボロ家が、古民家や金沢町屋となり、古民家カフェや町屋民宿に変身すると、オーナーも活用者も「付加価値を見出すセンスがあり、自分らしく生きる人」に格上げになる。ポピュリズムという大衆迎合主義は、スマホとSNSを武器に、既存の価値観を変えたり、創出したりで、経済を回せる時代を生み出したのだ。

ともあれ、今の時代の観光需要は意図的に作るものである。2000年の歴史をもつ、瀑布の上のできた集落。これだけでもポイントは高い。石畳の街並みに赤提灯をぶら下げ、滝沿いの楼閣もライトアップし、そのロケーションでパフォーマンスをやれば、写真映える観光地に昇格する！…だったのだろう。

芙蓉鎮の集落部分へは、わずかな距離をゴーカートに乗換えての移動だった。雨の今日も、物売りが出ていたから、私は10元のビニルコートを買った。そこ

に建つ木造が、典型的なミャオ族の家の造りとのことだった。

しかし、そこから、川までは、観光地の気配もないただのまばらな普通の家並みが続いた（多分、私みたいな経済オンチが普通に暮らしている地域）。これが観光地？は、川へ下りかかったあたりに、群像モニュメントがあり、ミャオ族とトウチャ族が、仲良く住み分けを決めた村の意味と分かった。



《芙蓉鎮の古い街並》

古い街並の方はそこから始まるのだった。ハンさんは木柵の造り（単純か、凝っているか）で、貧富が判る…の説明をした。あのねえ、今どきは、見るからに金持ちの外装にすると、トクリュウに狙われ、殺されるのよ！でもそんな家は番人も雇えたうえで、格上を見せつけたい金持ちだった…ということですね。

石畳の道の両脇に古民家が迫っている。街全体が、川への下り坂だ。土産物屋も出ているが、こんな立地の方が、高いのか？割安になるのか？わからない。

いよいよの川にかかる、家の構えの造りの土王橋は立派で、長椅子も備え、夕涼みの特等席だ。両脇にはずらっと楼閣が並ぶ。このライトアップがまた綺麗なしい。



《土王橋》

さらに下に芙蓉瀑布があり、滝の裏にも遊歩道があ

る。それで、どんどん滝下へ下っていった。本日も、歩く度2なのだ。昼食の予約時間に合わせ、下ではたっぷり時間がとられた。滝の裏側へも行ってみる。どのみち傘を差しっぱなしで、しぶきを浴びてもたいしたことではない。滝浦の洞穴の像は、原始時代からここに住み着いていた…の意味らしかった。水しぶきに濡れて、オニシバリ風の花が多く咲いていた。スマホ派のみなさんは、嬉々と撮影に励んでいる。定番カメラより、スマホ動画の方が映えそうなロケーションだ。



《芙蓉瀑布》

階段を覚悟して登り返す。狭い街並みは4連の赤提灯がぶら下がり、民宿になっているようだった。

（帰国してから、インフォメーションでゲットしてきたパンフレットを見ると、楼閣群の奥の森には、ケビン村が作られていた。内部は瀟洒なホテル仕様… WATERFALL CAMPING が紹介されていた。滝に舞台を掛けた野外劇場や、室内での舞踊ショーも紹介されていた。私はたしかに現地に足を踏み入れてはきたが、現状の半分も見てはいなかった…となる。）

バス停近くで昼食。トウモロコシが鍋に入ったり、冬瓜らしき煮物だったり、鴨の炒め煮？は、頭も脚も一羽丸丸が料理されているようだった。米豆腐という名物は、柔らかめの杏仁豆腐？の印象薄い料理だった。

次の南方長城は、1622年にミャオ族の反乱を防ぐため築かれたとある。山中に4kmほど石垣が続いているそう（看板にある範囲でのこと）だが、東門までの200段の急な石段が、これまたきつかった。土踏まズの骨折が完治していないN妹、元気印さんの高齢相棒が「辛い」とこぼすと、坂本氏は「中国へ観光に来て、歩くのが辛いはないでしょ」と、当然そうに答えた。でも、ずっと雨だから、敷石で滑らないように、躓かないように…の心労も増している。



《南方長城》

着いた先の広場には、碁盤の目のような印が曳かれていて、その升目に人が入って群舞する祭があるらしい(リニア駅のディスプレイには映っていた)。矛など昔の武器が展示してあり、武術のポーズのレリーフが囲んでいた。城壁には砲台もあった。元気な原宿氏は、続きの石段を上がって「何も見えへんで。まだ、続きあるけど、こんなの、行けへんで」と報告した。

今調べると、「有名な北方長城は北部遊牧民との抗争のシンボルであり、南方長城は南部少数民族との抗争のモニュメント」とある。3~4mの城壁が190km続いているそうだ。着いた先は兵站地跡で、その横の広場は世界最大の碁盤とされ、2002年に、ギネス登録をされているとあった。

しかし、ヒト気もない、車もない駐車場にただ立ち寄った風で、写真よりははるかに草木が茂り、案内所も閉まっていたチケットを買うでもなく、ピンと来ない史蹟だった。

つまりは、いつのまにか私達も、賑々しく、お待ちしていました風を観光地のように思い始めている。予備知識も、パンフレットも、読める看板もないとなると、そんな史蹟は、猫に小判か？豚に真珠か？何だったのか？のまま、記憶からも消える。曝け出しのまま、観光地であるのは、もう難しいかもしれない。予備知識を持ち、時間余裕をもって訪ねるべきが、この手の史蹟かもしれない。

さて、もう鳳凰県に入っているが、再度、ドライバー本位のトイレ休憩が入った。ここで、N姉と話すと、最初のスノーボーに衝突されての骨折も、トレッキングに出たの膝皿の骨折も、自払いでの治療だったそうだ。

帰ってから大怪我と判った経緯で、相手の名前を控えたり、証拠物を撮影しておいたり…の気が咄嗟に回らなかった。息子には叱られてしまったと言う。私は、その流れで、私も息子に、地震の共済金請求の際には、叱られて、やっと保険会社に電話しましたよ…と話した。N妹はスマホと一緒に記念撮影をやっているが、彼女の方はスマホを手にしていない。山道具の始末をしている…のように、服も妹のお下がりや娘のお下がりがりばかり…と言っていた。たぶん、山離れとともに、新たな思い出は、わざわざ残さない！のけじめを課したのだろう。私も、「やる、やらない」をなし崩しにではなく、意志を持って決めていきたいと願っている。

突如、最新駅に停まった。「これなあに？」だ。ここは新幹線とリニア(22年開業したばかり)が接続する鳳凰駅であり、リニアモーターカーに乗るために少々ややこしい手配をやるのだった。トランク類は、今宵の宿から来るバンに、ここで乗せ、運んでもらう。一方私達はこのバスのままりニアモーターの始点鳳凰古城駅に移動し、そこからリニアモーターに乗って、2駅移動し、以後は古城内のシャトルバスで移動し、ホテル入りする。



《モダンなりニアモーターカー駅》

それは古城市街に、一般バスは入れず、シャトルバスのみが回遊するため、そして、2駅でも、リニアモーターカーを体験するための措置だった。リニアは超高速でもなく、観光用、学習用、展望用だった。

鳳凰古城駅で下車し、エレベーターで下りると、まだ閑散とした広々施設があり、そこからリニアに乗った。どうも、行ったり来たり感があり、超高速でもないし…と不審顔でいると「リニアには乗らないといけませんから」とハンさんが漏らすように言った。これも、土産物店と同様な観光施策であるらしい。

2駅先は凝りに凝った外観で、鳳凰の現代モニュメ

ントが置かれていた。ここから、鳳凰古城全体が見える。市街の形が、沱江を背骨としてあたかも鳳凰が羽を広げているがごとく見えるのが、名前の起こりとの説明だった。そういえば、ペルーのクスコも、ピューマの形という説明だった。街も拡大するのだから…それぞれ「こじつけ」で、そして「地域のシンボル化」なのでしょうね。



《鳳凰の形とされる街並》

地上までは、丘陵地形に合わせた長階段が延々と、展望を見せつけるように伸びていた。こんなに金を掛けながら…でも、吹き曝しで、車椅子では動けないような接続の仕方…。どこか、ちぐはぐ感が漂うのだった。最後はエレベータで下り、その先で信号もない車道を渡ってのバス停で、シャトルバスを待つのだ。それは巡回バスなのに、ホテル前までつけてくれる。不便と便利の加減が、なんともハテナだ。

「82207」とは、別棟である8号館の、22階。一人参加ゆえに、今日も私は、皆とは別の高所階の部屋だ。計5万円で、毎晩とてもリッチな気分が味わえるのは、ペイできる贅沢と思った。

下のレストランで夕食をとり、そのまま古城のライトアップを見に出かけるという。ミャオ族の民族料理…と書いてはあるが、鍋用らしきに、野菜が別皿に重ねてあるのが、それかな？ザーサイのような漬物を細かく刻んで…もあるが、これまでとどう違うかは？

まずお茶が、やかんで、ボールに入れて置いてあった。こちらの鍋敷きはこういうやり方か？と思ったら、中国通姉妹（妹の、大学での第二外国語が、中国語だったそう）が、最初のお茶は、井と皿の浄め用のはずと言う。円卓に食器をセットしてあるままだから、埃を被っているかも。まず個々にそれらを浄めてボールに空けて捨て、改めて飲み物としてのお茶を所望するのが、風習だそう。ただでさえ狭い円卓だったが、

せつかく教わったのだから、そうやってみた。

雨は止んできたようだ。ホテルから出て、ピックアップ用のバス停で待ち、ライトアップされる中心部へ向かう。車が走れる通りの南華門からが歩行者天国になっているから、手前で下りて、少々歩いて、沱江岸に降りた。

たいそうな賑わいだった。兩岸の衣装レンタル店、飲食店、土産物店…煌々と灯りがともし、川縁の遊歩道は、押すな押すな状態。楼阁仕様の雪橋や、元は商家だった家屋がライトアップされ、ロック風音楽が流れ、民族衣装で着飾った娘や、ペアや、家族連れが、ポーズを取って、撮影に興じている。「今日が、たまたま、端午の節句の日曜日だからなの？」と聞いたら、毎晩こんな状態なのだという。1時間の自由時間になった。



《ライトアップされた鳳凰古城》

なるほど…今、金沢は、インバウンドの為の夜のイベントが少ないと、経済同友会あたりが騒いでいる。そんな夜の世界なんかを増やしてどうする?!と、堅物（優等生のままの価値観）は思ってしまうのだが、暗闇の中の灯りに群れて、昼の生業とは違う自分になって、羽目を外して遊びたい、それが楽しい…は大事な人寄せかもしれない。

若い娘たちが肩もあらわな衣装をまとい、化粧もしてもらい、頭飾りをキラキラさせて、ポーズ…は、いい時代になった証拠だ。どこかに赤い旗は翻っているのかもしれないが、国民服を着て、下を向いて…ではなく、着飾り、澄まして写真を撮って、笑い合う…自由と豊かさを手にしているのだ。アベックでの青年も晴れやかに彼女を引き寄せ、おばさんも着飾り、童子、童女にもそれぞれ皇子皇女のレンタル服があり、ノリまくっている。

これらが全部やらせのはずがない。昭和の頃の日本と同様、国が豊かになり勢いがついているのを喜び、幸せを実感している姿だ。「民の寵」論で言えば、一党独裁があるとうと他国への嫌がらせがあるとうと、確実に、民は貧しさから抜け出し、楽しめるようになったのだ。

こんなのが夜中まで続くと言う。シャトルバスに乗り、戻った。

◆6月2日（月） 鳳凰古城 張家界・七十二奇楼

出発は9時30分と遅い。近くの鳳凰古城の開門に合わせるためだ。しかし、22階ゆえ、悠々と窓をすかして寝たら、朝の5時半から雄鶏が鳴き出して、起こされた。あっちからもこっちからも「コケッコー」が響く。初めてのトレッキングのシッキムで、これに感心して、それを言ったらかえって、そういうことに感心するのか？と呆れられたものだった。

朝のバイキングで元気印さんにそう言ったら、下の階で窓を閉めていた彼女達は、鳴き声なんかには気付かなかったという。その代わりに、テレビをつけたら、日本人が中国人を虐める内容の映画ばかりをやっていて、「ああやって日本嫌いにさせるんやね」と、怒っていた。

「心房細動でも、そんなに元気に動けるんだったら、友人にもそう励ましておきます」と言ったら、「わたしや、三度救急車乗っとるけど、そんなもんビリビリしてるとこ焼けばおしまいや。一応、ニトロは持つようにしとるけどな。手かて、こことここと、ここ、切開しとる。糖尿病やと神経が詰まるから、切開して通るようにするんや。ほやけど、きちんとつまめんことあるなあ。こぼすのはそのせいやろうなあ」ほんと、逃げて逃げてじゃなくて、治して、勝った勝った…で、生きていかなくちゃ！



《鳳凰のモニュメント》

トランクはロビーに置いたままにして、またシャトルバスに。鳳凰のモニュメントが建つ広場から古城内に入る。貴族たちの屋敷は、博物館などに利用されているらしい。

外壁に、中国の文化人のプロフィールが並んでおり、その中の沈從文はここに住み、川端康成のようなノーベル文学賞を貰って当然の偉大な文学者だったが、時の政権を批判し、支援されなかったのも、もらえなかったとの説明。

あのねえ、文学賞も平和賞も、風向き任せの噴飯ものよ。こっちが、ノーベル賞という尺度を捨ててしまいうに限るわよ。そんなストレスは溜めるだけ損よ！まあ、中国人も、そういう言い方をするとすることは、結局世界一の国になって、自分の尺度が通るようになるしかないとなって、つまりは戦争がなくなることはない…の結論にしかならないわよね。

ハンさんが全集から「これが、一番有名」なんて説明してくれたが…その本も、作家も全然知らないのだった。それが国力。避けられない溝…。中国の一带一路を、私はなじれない。究極、NO.1であることが、最後まで生き残るといことになるんだから…。

狭い通り（東正街）をすり抜けたら、そこが北門で、特に立派な城壁が残り、間から見えるのが、昨日の沱江と判った。昨日見た雪橋が下流に見えて、たしかに同一だったが、昨夜のライトアップと違い、古びた家屋が並んでいるまでだった。なるほど、ライトアップは、即席のマジックだ。



《髪飾り売りの老女》

この辺りは、なだらかに水面に近づけるようになっていて、置き石伝いに対岸に渡れる仕掛けにもなっていた。水鉄砲遊びをする子供達、昨夜よりはるかに少ないが、コスプレでポーズをとる人達、その間を髪飾り売りの老女が、行き来している。物売り…資格も技

能もなしなら、そのあたりが現金仕事になる。日本だって、シルバー人材銀行に行けば、どんな仕事しかないか、どんな賃金かがわかるものだ。「昔は…」を言ったって、それが老人現在の評価の現実よ。でも、ござっぱりして、腰も曲がってはいない…豊かになった国での物売りなのだ。

ここの生姜飴売り場を集合場所として自由時間。原宿風夫婦は、さっと小路を引き返していった。スマホでチェックしてあった銘店が途中にあったらしい。私も、値段を明示してあった土産物屋に引き返した。少数民族の銀の飾りを模したミニ飾りが15元。10元もちらと見たと思うから、値切る。店主、翻訳スマホを起動させ、私は私で、数字を書いたの筆談。結局8個で100元に落ち着いた。次には、川沿いの土産物店で、ミャオ族衣装の人形を交渉。その人形を見せて、この意匠からの土産と説明しないと、何のデザインか判らないとも思ったからだ。たしか、トイレ休憩での土産物店には68元で出ていたから、それが38元であり、さらに35元と下げたなら、まあまあではあった。700円…やはり安い。



《ゲテモノ系の串焼き》

お、お、アンコールワットにあったような、イナゴ串、ムカデ串、サソリ串まである。P夫人がイナゴ串を買い、わけていたから、私も頂戴した。カラッと揚がっていて、辛子で臭みを消して、おいしかった。

遊歩道に下りたところに、遊覧船の船着き場があった。そこからは水深が深くなり、舟が通行できて、虹橋を越えたあたりまで移動する。このあたりの商家は、この川で荷物を運び、椅子を並べて川風の涼を取った。さらには、つかい棒で支えるようにして、ベランダを張り出しもした。それが吊脚楼と呼ばれる建物群だ。それらは今では民宿となり、一泊3食で、2000円くらいだという。しばしば3カ月ほど国外へ消えるらし

い原宿氏は、「こっちで住んだら？」と勧められていた。何職かがわからないけど、ファッションオンチの私でも、適当にではないある種のコーディネートになっていて、リングやアクセサリも同じ流儀でまとめているとは、判った。妻も夕食レストランならスカートとか、ワンピースとか、こまめに着替え、ネイルもピアスも毎度決めていた。判らないながら、一人参加でヒマだったから、観察して、感心していた。帰って早々に、娘の結婚式とかで、絶えず対等な夫婦らしい会話をしてきたから、団塊世代の、夫を立てつつも妻は夫を持って余すような夫婦像とは、確実に変わってきているんだなあとも観察していた。



《吊脚楼》

橋脚がアーチ型の虹橋をくぐり、いかにも中国風の万名塔脇を抜けると、終点。そこから徒歩で虹橋へ戻る。それは二階建ての大きかりな橋で、両脇はびっしりと土産物店になっていた。ここから坂上にも料亭やホテルが続いている。しばしの解散で、有名な鴨料理の店が多いのをチェック。黒瓦を重ねて湾曲させた屋根の古城風景は独特と思い、川中にやはりパフォーマンス舞台があり、写真があったなとも思った。絶景を楽しむ張家界と、歴史とコスプレを楽しむ鳳凰古城…いい取り合わせで、観光資源になる。



《コスプレを楽しむ女性》

この近くに、昼食レストランがあった。飲み物にはキーウジュースを頼んだ。中華料理にはそろそろ飽きた…の声もあったが、トイレのために3階へ上がったら、そこは中国人観光客専用だったが、同じメニューの円卓を囲んでいた。日本人用に別メニューにしているわけではない、元来の郷土料理と判った。ついでに書くと、トイレに紙はおいてない。ただ、こういう大型店では、見える場所に、例の大型のトイレロールが架けられていた。見える場所で、必要量をちぎってから、トイレに入るのだ。トイレはどこもほぼインド式で、高速道路のSAであれば、洋式が少々混じっていた。

店の下に、果物店があった。手持ち元が少なくなった元気印さんが、15元と表示してあるライチを「この10元（このお札分）しかない」と見せて値切ったといい、30個は入っている袋を見せてくれた。剥いて食べるものなら…と、私も買うことにした。でも店の奥で、10元(200円)分、正確に重さを計りながら…だった。桂林で見た時から気になっているジャックフルーツを試食。買うほどでもないか…。次に、目に留まったのが、ドリアン。今ではイオンでも売ってはいるが、50年前、新婚旅行のバンコクで「果物の王様といわれているが、とんでもなく臭い」と聞いた果物だ。あれから二度、完熟でないのと、冷凍を食べる機会があったが、ベストの食べ頃ではないため、なぜ王様評価なのか不明のままなのだ。その完熟らしきひとかけが、パック詰めされ、16元とあったので、納得で買った。新婚旅行以来の謎が、いよいよ解けるぞ！



《完熟の安い果物》

シャトルバスから降りた先は、見覚えあるリニア駅で、見覚えあるバスが停まっていた。鳳凰古城編をここから始めたのだった。ホテルから引き取ってきたというトランクを一応確認し、乗車。ここから張家界へ

引き返すから、長いドライブになる。やはり、新幹線でつなぐのが正解だろう。

今度もドライバー用休憩が取られ、その間SAを覗く。ショップのマンゴータピオカが8元。店内では、若者がビニル手袋を使い、きびきびと計量して、仕上げてくれる。日本もそうだったのに、今では不機嫌そうな顔で、仕方がない風の対応が多くなった（そういう躰をしなくなった）。老女は、聞き取れない会話や、避けようもしない歩行やの無神経ぶりに立腹ばかりしている。監視されない、指導されない…は、傍若無人に通じていく。そうそう、バスには持ち込めなかった！と飲み干し、ゴミ箱に捨てた。

ライチはこの量では多すぎ。隣が讃岐からの夫婦で、時折デジカメのシャッターを押してもらっていたので、お礼に分けた。

長いドライブゆえ、ハンさんからのよろずガイドも始まる。中国に省は23あり、大から順に、省→市→鎮→県→村となる。だから、日本の概念とは違う。ナンバープレートが緑なら電気、青なら燃料車。ハイブリッド車は少ない。電気自動車は電池が爆発する事故があり、人気は落ちているようだ。でも新技術で4倍近く走行距離が伸びたから、変わるかもしれない

今度は武陵源より南へ30kmの中心街へ向かっている。さすがにマンションが立ち並ぶようになってきた。100㎡が1000万円くらいなようだ。大きな人口湖もある。上海へ出かけた頃には、建設を中断した建物が見られたが、その後は回していったようだ。金沢など一軒が立ち退かないだけで、20年も道路が開通しないなど、所有権を公共より優先させ、無駄使いの極みをやっている。14億人が暮らし、高齢化していくなら、強引気味の計画経済で最大効率を狙っていかなければならない。



《都市計画でできた近代的な街並》

天門山の穴が見えるようになった。たたられた低気圧は通過し、明日は存分に景色が見られることだろう。

もう明日の晩には上海への飛行機に乗ること。そのつもりでの荷造りをするように…の説明がある。パスポート、刃物、リチウム電池に注意。最後にスーパーに寄る時間をとるから、それを空港でトランクに詰めてから、審査場に入る…を聞く。私は、そうとメモをとる。

ホテルフロントの吹き抜けは、ビーズを衣紋のように垂らした凝ったデザイン。街中ホテルゆえの垢抜け方だ。街中の分、コンパクトな部屋だった。

夕食再集合までの間に、まずライチを処分。現地の、完熟果物はおいしい。いよいよ、ドリアン…ねっとりからして、食べ頃そのものだったと思う。バナナをさらに追熟させたような…。これが王様？でも期待外れだ。この頃は糖度が管理され、当たり外れがなくなり、当方も熱帯系甘味に慣れた。そのせいもあるだろう。



《芙蓉瀑布で見た花》

そのまま優雅なコーヒータイトムとして、ヒマな回顧に浸る。

思い起こせば、ドリアンを知った新婚旅行は、結婚式に出席できなかった夫の長兄の赴任先を訪ねる趣旨での、バンコクだった。「滞在費持ち」といわれても、既成ツアーの中抜きで、払うものは払ったうえで、別行動にしたわけだ。

経済格差のさなかの海外駐在員は、広々の部屋に、お抱え運転手、住み込み家政婦が二人…の豪勢なもの。長兄・義姉も命じてばかりで横柄で…。歓待したいというより、成功者だと見せつけたかったのだろう。話題から外され、席を外せの素振りもされたし、二人だけの甘い旅どころか、疎外感を持つ旅だった。

帰国すると、国民年金の督促状が届いていた。それは婚姻届けに連動するもの。当時、夫は大学院の最終学年で、奨学金とバイトが収入だった。それで夫は国民年金に任意加入扱いとなり、その妻は強制加入扱いとなる。すると20歳から加入すべき義務ありとなり、4年分未納だが、遡って納入できるのは2年までにつき、2年分の督促…の内容だった。

20歳なんて、夫の存在も知らない。でも、問い合わせても、文脈はそうにしかならないのだった。余裕金などなく、実親に払ってもらった。役所とはそういう杓子定規をするものだ…は、後々、世渡りの役に立つことにはなる。

博士論文が通り、助手になったのは、半年後。やっと給料がもらえる…に、実家で次兄と同居の義母はさっそく「仕送り」を要求してきた。まだ、これから奨学金の返済が始まるはずなのに。

亡義父は学者志望だったが、義祖父が勝手に医院を建て開業させたとする義母は、これまたお嬢さん育ちで、仕事は誰かに押し付ける主義、お金はせびる主義の人だった。

一年後の、私が長男を産んで里帰りから戻った日には、今度は甥（長兄の長子）を伴っていた。甥は一年前、学力格差があると、中学入学から妻実家に先に帰国していた。それが妻方の父が倒れて預かれなくなり、父方のこっちは遠くて通えず転校も無理と理由を並べ、ここしかないと押し付けていった。直後に妻方父母は、アメリカ旅行に出かけたから、一年で孫守に音を上げ、仮病を使ったわけだった。

狭い公務員宿舎で、まだ3時間と寝てられない時期に関わらず…。実両親は呆れ、憤慨していたが、私は家庭教師もやって、彼の成績は勝手判らずの低迷から、1桁に跳ね上がった。5か月の長男を抱えて、一学期末の個別懇談に出向いた時には、女性担任が同情混じりの興味深げな目で対応したことも思い出す。

夏休みに甥はバンコクに帰省し、その留守の気楽さを味わうと、今後へのため息が出たが、二学期が始まって早々に、長兄たちの帰国が決まり、彼は引越していったのだった。

それは同時に、駐在員特典の「日本に残留扶養家族がいれば給料が二重払いされる」が終了も意味した。義母は金の湧く「打ち出の小槌様」ではなくなった。すると、実家内の次兄夫婦は「そもそもうちの扶養家

族ではない」と言い出し、長兄夫婦の「何を今さら」が衝突。さらに次兄妻は離婚していた実母の方との同居を叶えるべく、彼女が先に入居していた金沢の新興団地に転居を実行。「一人で暮らせない。行く所がない」と、義母が公務員宿舎に転がり込んでくる事態になった。

この時も、実両親は憤慨していた。「三男で医者。付属中高育ち、5歳違い。父は本人の大学入学時に死去、母は次男夫婦と同居」までしか、両親も私も知らなかった。

私は同情し受け入れたものの、義母がおとなしかったのは2週間ほど。すぐ開き直り、「医者のおっか様」に格上げになったとの見栄張りに執心し、金せびりを加速させていった。



《ミャオ族の典型的な建物 芙蓉鎮》

家族会議などなかった。末っ子で、父が闘病中だった夫は、中学から奨学金支給を受けての学業だった。しかるに父健在中に成人している義兄達は、弟宅には長居しているだけの解釈で通し、知らぬ顔を決め込んだ。同居の3か月後にあった義父の13回忌も、事前電話の「手伝う」は嘘で、住職と同時到着として義姉たちも客を決め込み、偽善の談笑で帰っていった。

それどころか、我が家に同居しているのに、「帰国してすぐ扶養から外しては顔が立たない」と、書類上は長兄扶養家族のままを続けた（引継ぎ書がないと、変更できない）。しかもその更新手続きに必要な証明を、毎年私が津幡から取り寄せ送付させられる（義母は判らんとって動かない）始末だった。一方で、民生委員は「あんたの所にはばあちゃんが同居しているねえ」と言って、認可をくれず、医療助手パートを始めているのに、保育園は自由契約手続きまでしかとれない。

事実通りの同居家族に申請して、老人扶養控除が使えるようになったのは、ずっと後のことだ。

言い出せばきりがないが…。

次に押し付けてきたのは空き家の税金に地代。どの支払いかを調べると、複数の遠い親戚分と混在しているうえに、肝心の家の地面は借地で、さらに道路拡張計画にもひっかかっている。医院と住居の2軒の家屋の登記もしてはなかった。奥の病室とされた長屋の10坪だけが、買ってくれと頼まれたとかでその分だけの土地登記があり、あとは全て借地だった。義祖父は借地の方が得の主義だったようだ。義祖父からの相続の際、5人兄弟での話し合いがあったが、長男である義父はすぐ怒り出すだけでまともならず、稼業の機場を継いでいた義叔父が、自分側の取り分だけ登記手続を済ませ、以来そのままできたという。

同じく、学者肌で人付き合いが悪く、末っ子の夫がこんなややこしい話を解決できるはずがなかった。ただ「払ってやれ」。苦情を言えば、だんまりか、喧嘩になった。

今も梅毒関係の仕事で医学事典に名前がある…と夫は尊敬しているが、私は息子達には、そうと伝えたくて、「でも、妻子に安住の地を保証しない男は、男の内には入らない」と諭した。（息子達は、それは実行している）。

まだまだある。同居前に義母が契約していた、葬式代用と加入した生命保険の、支払い書だけを「あんた払って」と押し付けてきた。受取人が長兄・次兄になったままを指摘すると、「それを直すと、郵便局員に馬鹿にされる」と言い、すつとぼけた。

これら策に水を入れるような出費ばかりを、夫は「払ってやれ」で済ませ、研究に逃げる。「おかしい」と義母に抗議をすれば、「世の中は、あんたの行つとつた大学のようなわけにはいかん」と開き直る。あげく「机の下にでも置いてくれ」と捨て台詞を吐き、籠ってしまう（しかし、平然と食卓には座る）。

理不尽のいろいろがありすぎた。それは、私に学習塾を始めることを決意させたし、社会人山岳会に入会する決意にもつながった。それだって、山から帰ってくると、私のスリッパは毎度消えているものだった。

これで終わってしまったら、聞き苦しすぎる、嫁姑愚痴のオンパレードだ。背景に、少しは昭和史が絡んでいる。

義祖父の時代は羽二重輸出を稼業とし、本津幡駅ま

での線路も自前で引く羽振りだったらしい。商売をしていたから、遠い親戚分まで適当に台帳には登録し、固定資産税を払い、経費処理をしていたようだ。太平洋戦争で、その私線も織機も供出となり廃業。

次に、独善で医院を建て、研究道楽の長男を開業させた（行き遅れ年齢だった義母は、後妻として嫁いできている）。機場を継いでいた方の次男は、嫁の姉の嫁ぎ先・和倉のK屋の経理（のちに常務）に送り込んだ。同じく津幡の名士Mは、娘たちを有力者に嫁がせ、特に長女は、子供がいるのに離婚・再婚までさせ、K屋の和倉移転を支援していた。義母にとっての弟嫁の姉とはおもてなしで有名になった大女将のことだ。

中枢を身内で固めての行き届いた宿はNO.1となり、日本有数の旅館になったが、義母の言うには、自分達がボカンとしている間に、蔵からは逸品が持ち出され、消えていった。ちなみに、昭和天皇来県の際、K屋にて後ろに立てられていたのは、元を糺せば本家の蔵にあった金屏風ということだ。

義弟一家はどんどん羽振りがよくなり、一方熱の入らない医院は閑古鳥が鳴き、さらに夫は発病する。病室を貸家にする事で糊口をしのいだ。その時、長男は帰省転職を考えたいが、嫁は共倒れになると拒否。その弟は、大学受験をすっぽかし旅をしていたという勉強嫌いで、高卒就職で実家にいた。その結婚が決まった時、妾にいびられ育ったという嫁に「お父さんさえ元気なら、あんたみたいのをもろとらん！」と、義母は貶めたようだ。

これらを私は、少しずつ知っていくことになる。

昔のお嬢様は、時代に流されるだけで落ちぶれ、気位は高いまま、息子にせびって見栄張りをするようになっていた。「姑様」としての嫁いびりでストレス解消とし、溜飲を下げていたわけだ。

我が家の中古住宅の取得、物件を三者で交換しての新築、リフォームなどは、経緯を見ていた義姉の夫が、契約などに立ち会ってくれ、実現していったことだ。隣人がずっと彼を夫だと誤解していたくらい、夫はどれにも立ち会わず、相談相手になっていない。

学者馬鹿、極楽とんぼだ。学内情報などは二回りしてから入るのだろう…くらい疎く、出遅れ、貧乏くじを引くばかり…。

でも、そろそろ持ち上げねば…(笑)。「アンケート」

に依えての図書カードも私に渡すくらい、全ての収入を預けてくれたし、一切贅沢をしない。それに、山遊びにはつきあってくれた（彼自身も、職場での憂さ晴らしをやれたわけだが）からよしとしよう。それに、飲む、打つ、買うなどありえない。「実は…」の話を山ほど聞いているから、私は、そちらの悩みからなら、免れていられたわけだ。

私がどう対処したかといえば、いらつけば包丁で指を切ってしまう、子供が交通事故に遭ってしまう…などを体験し、心中無視を決めた。わが子を守るためにだ。夫に兄弟などいないと思えばいい、義母は…〇〇と思えばいい。

どうあがいても、舟田家内で、事情は何も変わらない。立腹するだけ損！に尽きた。



《黄龍洞で見た花》

さて、23年後、もともとの身勝手に、認知症が加わった義母は「判子がなくなった」を言い出し、「よく探したら？」に対し、目を吊り上げて罵り出した…。

紀行になんでこんなことまで書いているかといえば、職場で、認知症症状の進んだ入所者が、時折それと同じ表情で、目を血走らせ、殴りかかってくる…その両手を押さえる度に、あの義母の顔が蘇る。

思い出すだけ時間の無駄と「削除」してきたはずの、理不尽だった日々まで思い出されてしまう…。

でも、その度、「お疲れ様」で帰ってしまえるし、対価ももらえるから、理不尽だった昔よりずっと楽！の結論になる。ほどほどに働ける至近の職場で、外国旅行のための休みも取れる…と思い直す。苦は楽の種と言ったものだ。

ともあれ、その時、私はもう「自分の人生を守る」の決意をしていた。30分の間、罵倒放題にさせてから、

もうこれで微塵も後悔はしないと腹をくくり、襖を閉めた。

その日も遅くに帰ってきた夫に「ここに座って」と言い、義母にも「座って下さい」と、二人を並べて、「この家から出て行って下さい！私は自分の人生を守ります！」と宣言。

それから、初めてのまともな親族会議が招集になった。それは義姉も交えての、義母の押し付け合いになった。夫も、ようやく、目が覚めたらしかった。貧乏くじを引かされるばかりでも我慢してきたつもりだったが、兄たちは、感謝の念などもってはいない。23年へのねぎらいどころか、火の粉を被るまいに必死…に冷え切ったのだった。

話がまとまらなくても、次へは進める決意だった。相談先で、「認知症の場合は、行先はグループホーム」と言われ、夫と、義母を連れ、一緒に見学に行った。義母はおやつを食べている入所者に近寄り「あんた！こんな所におりたいかいね！」と詰め寄った。職員は「こんな人は、無理です。どこも預かれません」と言った。

再度、親族会議。こんな時こそ、誰が財産らしきを相続しているか？が判断基準になる。15年前、道路拡張工事にあたり、行政が地権者まとめにかかって整理を進めたが、津幡の100坪にまとめられた土地を相続したのは次兄だった。長兄も夫も、しがみつきたい土地ではなく相続放棄の印を押した。次兄は貸しアパートを建て収入を得ていた。次兄の嫁が折れ、義母を引き取るとなった。

その日、義母は一切片付けることなく、紙袋を下げてだけで次兄の車に乗って行った。15年前にそんな相続放棄をした時も、その前から、次兄夫婦は、我が家に義母がいた23年の間一度も送金などしていない。扶養移転の手続きもすぐとっている。しかるに、兄嫁は手紙で「仕送りは？」と言ってきた。払った…。

次兄宅で、二人の老女は二つの仏壇を並べ、暮らしたらしい。その6年後に義母は往生。半分の期間は入院で、最後の2年は寝たきりだった。

そのように、押し付け放題だった親族たちは、それに見合った老後になっている。結局、子供全員が結婚し、孫も誕生しているという、まともな世代交代をやれているのは、我が家だけなのだ。

ともあれ、そんな事情で、夫は私に頭が上がらない。でもそんな経緯を黙っているせいで、よそ様には、今現在だけなら、私が、いたって勝手にやっている、恵まれた妻にも見えているらしい…。

生涯唯一の著書「エベレスト見に行くモン！」にも、このあたりを書いてはいない。本当は、ヒマラヤへの動機の大部分といえるかもしれない。内でも理不尽な我慢をし、外でも半端仕事にしかならぬため馬鹿にされ、足元を見た搾取もされた…。それなら、そんな立場ならこそ出掛けられる、とっておきの旅に出たい…が、一ヶ月もかかる旅への動機だったのだ。

でも、それら本音を書いても、一時清々するだけで、本の品が落ち、さもしくなるだけ…。それくらいは判断でき、活字にするのは避けたのだ。

しかし、そんな旅を実現させて気付いた。

人の世には、誰にもカルマと言えものがある。あちらを立てれば、こちらが立たず…ばかりの中で生きている。誰かを悪者にしたり、あの人さえいなければ…で解決になるものではない。

誰がどうのではなく、自分のやりたいことは何か？の方が肝心だった。人を変えられなくても、自分を変えられる…それに尽きる。(これが「悟り」)

カルマといえる責任を果たしたら、「自分の時間を大切にしていこう」でよい。それだけなのだ。

「行って来るわ」「楽しかったわ。ありがとう」をやれている。理不尽な日々の中に、結局すごい財産作りをやっていたことになる。今はたっぷり利息をもらっている最中なのだ。

でも、凡人は、ぐだぐだと3ページ近くも書いてしまった…。まだ、何度かは思い出すことだろう。苦勞した私に比べ、三人の嫁は…となりそうなあたりに、まだ、蒸し返されるかもしれない…。

たかがドリアンひとかけで、これだけの思いが走馬灯のごとしになった…。

さて、外のレストランへ。入口に、ザリガニの茹で物が豪勢に盛られていた。写真の特色打鼓皮が名物のようで、それはパンに具材を挟むエジプトにも似ているようだった。今日が夕食の最後になるのだった。

そして、「ハンさんからのプレゼントです」とは「今日が誕生日の人と、明日が誕生日の人がいます。お祝

いのケーキです」…それは讃岐夫婦のことだった。さらに翌日には元気印の相棒さんも誕生日であったが、もう祝うタイミングがないゆえ、「まとめでのバースデーケーキ」なるものが、披露された。

「甘いものはパス」が一人抜けて、16等分なら分け易い方だが、そんな難題は、一番若い、中国語通妹にやってもらうことになった。大きいの、倒れたの、フルーツがの…と騒いで、「おめでとう！ありがとうございます！」と、苺ケーキを味わった。



《ライトアップされた七十二奇楼》

「ライトアップされてからでないと…」と、かなりゆっくりしてから、バスで七十二奇楼に移動する。それは2018年にできた、トゥチャ族の吊脚楼をモデルに、さらに天門洞の洞窟も取り入れた、元々は集合住宅なのだ。しかし、ライトアップされ、下にはモールを配置。舞台の出し物や飲食店を並べた、夜の繁華街スポットになった。街外れに建ち、バス広場が設けられ、夜のお騒ぎ場所になっている。この時は孫悟空將軍が広場において、撮影対象になっていた。舞台には、深夜まで次々と出し物が出てくるようだった。

ライトアップして、観光地として仕掛ければ、観光客は楽しく騒いでくれる。お金も落ちる…。そういう観光は発展といえるか？なんかなあ…宿題にしておこう。

我が五つ星ホテルライフの方もほんとに最後…ゆっくりバスタブに…ムム、高くて、かなり跨げない。欧米人仕様か？漢人仕様か？

◆6月3日(火) 天門山 張家界空港～上海

一度も、目覚ましベルを聞くことはなかった。普通に目が覚める。見下ろすと道路清掃車がゆっくり走っているのが見えた。片道4車線もある。

朝食会場には、韓国人らしきが多い印象を持った。

より都会風に、機能的に料理が並んでいた。こちらでは、麺がもう丼に仕込まれていて、指さすと、ずらっと並んだ網籠の一つに入れ、加減を見てさらに青菜を加え、湯切りをして丼に戻してくれた。

元気印ペアは、「豆乳もええなあ、機械買うかな」「あんた、続かんえ」「牛乳より体にいいんやろ」と、また漫才風会話をやっていた。彼女はまだ（自分の会社で？）働き、ボーナスは寄付に回しているとのことだった。「息子に家も車も買ってやったんに、『何もしてもらとらん』言いよった」 そんな三人の子供のうちの二人は結婚していないようだ。

たぶん、息子にすれば、「親が突っ走るから、やりたいようにやらせてやった」までで、自身が望んだわけではないのだろう。親が潤沢だと、よくあるパターンだ。ちなみに義父母もそうだったわけで、愚かはどこにも起こり、繰り返されるのだ。

こんなその場限りの、気楽な言いたい放題も、もうおしまいだ。



《街中のロープウェイ乗り場》

ロープウェイ乗り場は、街の真ん中にあるのだった。天門山まで、7455mの世界最長のロープが伸びていて、標高1500mまで、約30分で到達する。普通なら、麓までは車で林道を走って…の部分がつきものだが、街中に車を停めて、そのまま乗車して山頂なのだ。

8人乗りに、ハンさんと一緒に乗り込む。普通の街を越え、鉄道を越え、山村を越え、後半は岩壁に迫って37度の傾斜でせり上がっていく。この急傾斜ゆえ、雲がよく湧き、下まで見えることはあまりない…だったが、旅の最後は、よく見えるというご褒美天気になった。こんなに手軽で、しかも周囲は断崖絶壁であるから、ムササビスーツでの急降下や、溪谷綱渡りや、危険スポーツのメッカになっているらしい。

天門山は台形のテーブルマウンテンだ。山頂(1518.3m 雲夢山頂)はあるが、そこを回ると4時間

以上かかるので、私達は A コースと書かれた、左の栈道を巡り、天門洞に向かう方へ進む。右に見えていたもう一本の索道は、快速ゴンドラで、帰りに乗るそうだ。また、天門洞からは、999 段の階段を降りても、洞窟エスカレーターで下りても、どちらでも可だった。



《天門山の立体図》

まず、ハンカチの木の実がなる広場へ。ここでガラス栈道に進むか、避けるか？の選択ができる。もちろん崖沿いの、ガラス栈道側を選ぶ。

玻璃大橋で慣れたように、布靴をかぶせて、ガラス板を歩く。ここにはカメラマンがいて、やはり記念写真を撮り、売っているのだった。



《天門山のスカイウォーク》

上がった所がムササビスーツの滑空基点。それは 4 か所あって、毎年 9 月 15 日に、大会があるという。中国人の選手はまだ、一人だけらしい。断崖につけた栈道（スカイウォーク）もなかなかのものだ。やや内部に板張りの休憩所があり、一休み。軽食も売っていて、リゾートマウンテンだ。

そこから長い長い、地中エスカレーターを乗り継ぐ。壁の写真パネルには、危険スポーツをやっているのと、なぜか狐モチーフの舞台も。



《天門洞への長いエスカレーター》

着いた先は、縦 131.5m、横 50m 強とされる穴の下面。仕切りの向こうが天界で、こちらが人界だそうだ。最高技術を乗り継いで、謂れだけが古風。

そこから真下に 999 段の石段が伸びていて、左には階段回避者用エスカレーターがある。ここで希望に合わせ、別れる。「今は 11 時 20 分。12 時 15 分に、下の広場の左にある郵便局前で集合」となった。

階段は、3 部分に分かれている。手すりが設置され、両脇と合わせ、4 本の手すりのどれかに掴まって、下りればいいのだ。並みの傾斜ではなく、他人を巻き込まず、巻き込まれないためにも、掴まるのは必須だ。

こんな階段を下から登ってくる人達もいる。滋賀の太郎坊山のようなもので、登り通せたら、大願成就になるような謂れがあるのだろう。坂本さんには何度もカメラを預けて、証拠を撮ってもらった。



《999 段の階段にチャレンジ》

グレートネイチャーの映像は、天門洞の穴をガスが通り抜けて行くのを、いかにも深山風景のように撮っており、こんな人だらけを見せていない。不思議でもあるし、かえって誤解させる映像だなあとも思った。

着いた先の広場は、記念撮影舞台が組まれていたり、スイーツブースがあったり。暑かったので、ライムの入った飲み物を買う。

ここにも清掃人が多数いて、当然にゴミ箱へ空きカ

ップを片付けることになる。ひがし茶屋に近い我が家の周りに、パン袋などが捨てられているが、ここは当然にない。そんなことでも、躰を抜かした自由は、人を横着にするだけ。周囲を不快にさせない、清潔な環境を維持するには、「統制」と言う名の躰をしていくしかないと思うのだ。

結局、先に書いたように「面倒を押し付けられっぱなし」できた私は、つい、「それを、誰が後始末するの？」の発想になる。今現在の「自由」には、そういった責任を感じられない。

「スマホは便利」とやって、スマホ依存症になった子供と、その将来の後始末を誰がやるの？ 私は性善説ではなく、性悪説である。社会人の基本と、食べて行く基本を教えるべき、守らせるべきと思っている。

やおら、郵便局なる所へ行くと、天門山図柄のレターセットや、地図もどきを売っていた。全員無事、下りついたようだ。

そこから水平移動で、26人乗りの快速ロープウェイにつながる。さらには狐が屋根に寝そべる麓の施設につながっている。ここには、女神狐（天門狐仙）と樵の悲恋伝説があって、それが、天門山を背景にした野外劇場で演じられている。



《野外劇場》

すなわち天門山エリア（5A級の名勝地というランク）は、フルコースでの娯楽施設になっているのだった。あっぱれというか、感心した後は、少々やり過ぎかも？お値段が261元なら、ヘルスセンター感覚かも。

そこから、シャトルバスで、元の乗り場に戻り、いつものバスに落ち着いた。

ここでの名物は火鍋料理だという。めずらしく鍋奉行が付いて、一旦鍋の内容物を、みな茶碗に分けてから、麺をざっと入れた。木耳料理や、蒸しパンも、

こちら風か？だった。隣の土産物店では、乾燥キノコを売っていた。グロテスクなアミガサタケも入っている。昔、富山の来拝山で見つけて、それが食べられると聞いてびっくりした覚えがあったから、これで試せる…と買った。



《名物の干しキノコ》

次の立ち寄り先が最後のショップ、砂絵博物館だった。鶯のからまる、ハイカラな建物がそう。武陵源ゲートで見た砂絵の元祖だ。この家の主が技法を確立し、各国に宝物としての納品をしているという。らせん階段にはその証拠写真が飾られていた。絵具代わりとしての色彩をとりだしただけでなく、砂や岩の質感も利用して、石林を主体に風景画を描いている。

二人購入した人がいた。誕生日を祝ってもらった讃岐夫婦も、よい記念品として入手していた。

ようやく、マーケットタイムになった。いわゆるデパートの地下に食料品、二階には洋服類がある…となって解散。私は地下へ行き、バラ撒き用菓子と苺茶（張家界の特産）をゲット。乾物の豊富さには感心。干せば風味が増し、貯蔵もきく。複数を使えばより栄養価も高くなる。これらは医食同源の国の財産だ。

ここへ来る前「犬も食べるんですか？」と質問した人がいた、狗肉とは赤犬の肉のことだ。隣の貴州や雲南省では食べるもので、それが食文化だ。牛は食べておいて、犬なら残酷…も身勝手な話ではある。「だから中国人は野蛮」へいくのは、もっと幼稚だ。日本が豊かになった分上品ぶって、他国をなじる…は、ただけけない。世界中がどんどん幼稚になって、べた可愛がりしたり、反対にすぐ切れたり…は嘆かわしい。豊か＝人格陶冶とは違うなあ…をいろいろな場面で思っ

てしまい、それが老化か…に落ち着く。

まだ、夕食までの時間が余り、ハンさんにならって、

ミルクティーを注文した。なかなか出てこなかったのは、ライン注文の飲み物造りが溜まっていたからだ。さらに紙パックに入れて封をした包を次々と配達人が受け取っていった。たかが飲み物までを、配達するんか？便利と言うか、こんな便利にしていいいんか？判らん…。(世界街歩きでは、お茶のグラス一杯を配達するサービスを見たが、待ってる間に湧かせるのに…とやはり思ってしまった。)

それでも時間は余った。なにしろ張家界発上海行きの飛行機は、深夜の23時25分発なのだ。

やむなく、近くの大庸橋公園へ出かける。そこなら天門山の遠望を楽しめるだろう。計画都市は、贅沢に公園面積をとってある。どうにかビルの谷間に天門山が見える地点を見つけ、集合写真撮りに興じる。二胡の練習をしている人がいた。説明してもらい、弾いてもらい、「ありがとう」を言うと、むこうも「聞いてもらってありがとう」を返した。個人同士なら思いやった言葉が出て、気遣いをやれるのに、国になると、「弾圧」の「威嚇」のになる。厄介なものだ。



《天門山をバックに集合写真》

本当に最後の夕食は、街へ来た分、卓上コンロがこざれいになったか？鍋料理に肉と野菜の炒め合わせに…食では誰も不調者は出なかったし、栄養学的にはバランスが取れていたと思う。中国にも宮廷料理の系統はあるけれど、庶民が、安全で安価で栄養価も高い…SDGsに叶う食事をとるとなると、この旅での料理はお勧め。「食べる」への向き合い方が、健全だと思った。

夕暮れの天門山に見送られ、張家界空港へ。空港内で、トランクを開き、慌てて乾燥キノコや、バラ撒き土産を詰め直す。たまりにたまったミネラルウォーターのペットボトルはハンさんに預けた。彼は8日から、

次の阪急の団体を迎えるのだ。

空港免税店には、翡翠、冠デザインからの銀製品が並んでいる。本物の銀製品だと、598元。錫製模造品の10倍だ。模造品のちやちで思い出すだけでいい…。

◆エピローグ

25時35分着。トランクを受け取り、そのまま、隣接ホテルへは、「あくまでシャワーを浴びてもらう程度。眠れませんよ。目覚ましを必ずかけて下さい!」。1時間半後、再集合して搭乗手続きへであった。

飛行機に張家界への直通便はなく、上海や広州からのアクセスが便利とある割には、時刻的には甚だしく不便。これも、空港の立派さの割には、ちぐはぐに思えた。

入室前にもらったコンビニ製のおにぎり、サンドイッチも慌てて食べてきたが、「いつ、食べるの?」の人は、手荷物検査時点で没収と気づいて、慌てていた。そこを通過してから、また、ただただ待つとなって、機体整備や搬送に時間を取られると理解していても、持て余す時間だ。

上海便の中の機内食が半端で、結局私は、因縁の「はるか」は一便前に乗り、京都駅の和食で口直しをした。

「はるか」の自由席で、韓国人らしきと隣り合わせになり、切符の乗り換えを尋ねられた。京都駅以西の一般駅の名前など知らない。ちょうど乗り合わせた、元気印ペアに尋ねると、「判らない」だったが、「気い付けて行かれやあ」と、彼女の肩を叩いていった。

きびきびと、きちんとした日本語を話せるビジネスウーマンらしきは、新大阪で下りて行った。

今朝(6月17日)の朝刊には、「就職難韓国 日本目指す若者」の見出しが出ている。日本への就職者は昨年米国を抜いて1位になっているとのこと。

若者こそは、歪んだ情報に踊らされずに、しかと未来を見すえて、行動してほしい。競争で生きてきた団塊世代とは違う価値観で、舵取りをしてほしい。

老人は、本来の寿命で、オサラバとしていきたい。

「あらら、こんなことまで書いちゃって。まだまだ若かったわねえ」と、これを見直す日がくると、願って…。

—完—